

さまざまなマイノリティーの生き方に学ぶ

杉田 穂子

青山学院女子短期大学は、現代教養学科、子ども学科の両学科共通の現代教養コア科目においては「共生」が学びのテーマの一つになっている。また子ども学科においては要養護（社会的養護を要する状態）やしょうがいのために支援が必要な子どもとその家族に寄り添う保育者の養成に力を注いでいる。近年の社会のマイノリティーへの視点をみても、障害分野では、しょうがいの責任をこれまで「個人」に押し付けてきた考え方から、その責任を「社会」に問うパラダイムシフトがみられる。日本でも2016年4月障害者差別解消法が施行され、行政機関や事業者には、しょうがいのある人に対する合理的配慮を可能な限り提供することが求められるようになった。

このような状況の中、本プロジェクトではさまざまなマイノリティーを巡るこれまでの歩みと現状を整理し、これからの社会への提言を導き出すことを目的とする。そのためにマイノリティーに対して「支援の必要な人」という見方ではなく、「さまざまな厳しい状況を潜り抜けてきた人」つまりレジリエンスの高い人という人間観から捉え研究を深めた。

2018年度は、視察研修を2回実施した。1回目は、2018年9月兵庫県伊丹市、西宮市での重度しょうがいのある子ども・大人への支援の取り組みを、2回目は、2019年2月福島県郡山市での身体しょうがいのある当事者が運営する組織の取り組みを視察した。また横堀は独自に里親支援の枠組みの中で支えられながら委託児童の養育にあたる里親およびファミリーホームの養育者のヒアリングを実施した。他にも構成員（辻、横堀）による研究会を2回実施した。

また講演会は以下の通り3回実施した。

第1回講演会（2018年10月12日）

「“マイノリティーの生き方”を支える仕組み ～イタリア・トリエステ研修からの学び」

講師 吉川 かおり（明星大学人文学部福祉実践学科教授）

第2回講演会（2018年12月7日）

「障害者権利条約の実施とインクルージョンインターナショナル（国際育成会連盟）」

講師 長瀬 修（立命館大学生存学研究センター教授）

第3回講演会（2019年3月1日）

「マイノリティー運動を『自己表現』から読み解く——70年代の障害者運動・ウーマンリブを中心に」

講師 荒井 裕樹（二松学舎大学文学部講師）

2019年度は視察研修を1回実施した。視察研修は、2019年9月1日～7日英国ロンドンにある MENCAP で知的しょうがいのある人に対する優れた取り組みを学んだ。その

目的は以下の4点である。

- ・障害者の代弁活動と当事者活動支援の歴史
- ・重度重複障害者の福祉：現状と展望
- ・教育におけるインクルージョンの取り組み
- ・出生前診断をめぐる状況 特にダウン症のある人やその家族の取り組み

この視察のために7月20日には事前の勉強会を、11月30日には報告会を行った。

また講演会についても以下の通り実施した。

第1回講演会（2020年1月17日）

「障害のある人の意思決定支援 英国、南オーストラリア、日本での実践」

講師：水島 俊彦氏（法テラス埼玉法律事務所 シニア常勤弁護士）

これらの活動を経て、今回の総合文化研究所年報ではそれぞれの研究員が以下のような内容をまとめた。

武居：「知的障害者のアドボカシーとは何か？～イギリス・メンキャップの取り組み」というタイトルで、その内容は以下である。1946年に結成されたイギリスの知的障害児者の親・当事者・支援者の組織 MENCAP は、約30年前から知的障害者を職員に採用し、わかりやすい言葉や文章を共通言語にしながら、彼らの願いやアイデアを事業に展開しているユニークな団体である。どのような経過を経てこのような「関係の成熟」が生まれたのだろうか。メンキャップのシンプルでわかりやすい言葉は新しい視野を開いてくれる。その歴史と現在の取り組みを現地取材した。

辻：通有化している少数者に対する認識の枠組み自体を歴史的に問う論考を準備した。少数者の社会的認識に際して、研究者自らの社会性（ときに敵対的ですからあるはずの）を組み込まないように思われる素朴な実証主義を排し、具体的には、近代資本制成立期のルポルタージュ、文学テキストの絡み合いの中から、不可視化された社会的弱者に対する貶め、排斥の機構について、ダーウィン、マルクスらの自然史的観点から読み直しを背景に、今日的視座の組み直しと新しい人間性の認識への方途を探りつつ、思考を深めた。

横堀：「社会的養護のケアリーヴァーへの社会的サポートをめぐる課題」と題し研究成果をまとめた。社会的養護を必要とする子どもたちの自立支援をめぐる課題は今も根強くある。制度拡充は手がけられてきたが、未だ十分ではない。ただ自立支援策とともに当事者の「声」を聴こうとする取り組みやピアサポートとしての当事者活動はすすめられつつある。アドボカシーの実践化についても検討され始めた。自立を応援する社会資源も少しずつ開発されてきている。そこで、児童養護施設・里親等によるインケア・養育の間にできる試み、ケアから離れた人たちの自立をより確かなものとするための社会的な取り組み、それらのもつ可能性に焦点をあてて考察した。

杉田：昨年研修で訪問した福島で出会った女性へインタビューした内容をまとめた。特別支援学校の高等部を卒業後、一般企業に就職し、[障害のない人の社会で対等に頑張る障害者]であった女性が、企業をやめ、[障害のある自分だからこその社会を変える障害者]として障害者団体で働く方向に生き方を変えていく姿を描いた。

今回のプロジェクトで、知的障害だけでなく身体障害、国内だけでなく英国などに目を向けることができ、研究や授業の内容を豊かにすることができた。